

Special Essay

本の重みとビッグデータ

皮膚科学講座 古村南夫

研究者の悩みは書籍や書類の山だ。腰を痛めてから異動のときには特に付き合いたくない。恩師の形見の専門書や大学卒業記念アルバム、研究施設報告書は思い出も詰まって余計に重たく感じられるが、電子化への思いもよぎる。

8000円で買える重さ200g、容量1TBのポータブルハードディスクがのみ込む300万ページの情報は、紙の重さで15トンにもなるそうだ。2TBでは学術研究図書館1つ分という。低価格の記録媒体の大容量化とネット環境の充実で、パソコンやスマホ、ICカードから日々発信される情報はもちろん、個人のネット検索、カード決済、位置情報、買い物でちょっと手に取った商品の情報までもが、日常的に逐一記録されている。これまでの全書物の文字数よりはるかに膨大で解析不可能だった「ビッグデータ」の分析技術の進歩により、大きな変化が起こりつつある。

電子書籍化の達成率は、米国では専門書が100%、一般図書も70%に達し、街角から書店が消え、自宅にネット環境がなく電子化のあおりで情報難民となった低所得層向けの電子図書館が地域ごとに再構築された。

米国では20年以上も前に、公立図書館と大学、研究施設の図書館の情報ネットワークが電子化された。日本でも、ここ5年程は電子化で図書館に通うことがめっきり減ったものの、完結した情報の集大成として静的で閉鎖された雰囲気も依然感じられる。家電業界が米国に30年遅れで大転機を迎えたように、ビッグデータ解析や知財管理では20年遅れとされる日本にも開かれたダイナミックな電子図書館が現れるのだろうか。

経費削減で蔵書数が減少傾向の国公立大学と対照的に、私学図書館の蔵書数は増加し、公共図書館の貸出し数も個人の書籍買い控えで増加傾向にあるという。大阪市は立派すぎる中之島図書館を美術館に転用し、神奈川県立図書館はライフイノベーション特区中核施設の一部として移転された。豊橋市では地域情報センターとして市民ホールとのハイブリッ

ド図書館へ、武雄市は民営化など時代とともに推移している。一般的なデジタルコンテンツを読む公立図書館利用者の大多数は娯楽目的だが、専門家が日々発信する情報をビッグデータのアカデミッククラウドとして求める人も学際領域で増えているらしい。その一方で、今度は洞察の深さを大切にする考え方である「スモールデータ」が来年のトレンドキーワードになるという。

出版されるたびに分厚い専門書が本棚に並ぶハコモノ「図書館」から、知や創造性を育む環境としての「図書環」への提言もあり、図書館の未来についての議論は尽きない。

